

祝本狂言集について ： 狂言記・他台本との比較から

著者	大倉 浩
雑誌名	文藝言語研究．言語篇
巻	41
ページ	57-68
発行年	2002-03-30
その他のタイトル	A Note of Iwaibon-Kyogenshu
URL	http://hdl.handle.net/2241/9782

祝本狂言集について

——狂言記・他台本との比較から——

0、はじめに

『祝本狂言集』（以下「祝本」と略称）は、成立年代や筆者はともに不明ながら、永井（一九八七）の紹介によれば、内容的には天正狂言本と虎明本・天理本との中間に位置する、流派分化以前の狂言の姿を残す貴重な台本と見られる。

筆者は前稿（大倉（二〇〇一））で、先行研究に依りながら、狂言詞章の用語整理・統一の過程で注意される語句について、祝本と狂言記（特に外篇）とを比較し、特に外篇の中でも古い用語を残す「外篇Ⅰ」の曲との関係を次のように述べた。

1、祝本の成立は、外篇Ⅰとの用語上の類似からも、外篇Ⅰに反映された狂言と同時期、すなわち狂言の固定伝承期の最初期、一七世紀前半と考えられる。

2、狂言固定伝承期の詞章整理・統一の動きの中で、祝本は外篇Ⅰや大藏流虎明本・和泉流天理本とは異なった傾向にある。

本稿では、こうした見方を踏まえ、祝本のいくつかの曲について、内容上の比較を踏まえながら、注意される

大 倉 浩

用語や気づいた点を述べてみたい。

一、止動方角

前稿でも指摘したが、祝本では文末表現に「候ふ」が他台本より多く使用されており、特にこの「止動方角」では多用されている。その用例を見てみると冒頭の大名の名乗りも使われており、さらに、

①「畏て候」とてまいる所で「又今・色申付る事ある」といふ。「何事にて候」と大郎言。(二オ)

など、太郎冠者から大名へのセリフにも使われ、

②大名「なんじがあまりちかく参候間 馬おどろくほどに今度はあとよりこい」といふ所で、(三オウウ)

では、大名から太郎冠者のセリフにまで現れる。こうしたことから、この「候ふ」は、登場人物間の敬意の表現というよりも、実際のセリフの聞き手である観客(見所)を配慮した語とも考えられる。ただし、セリフ以外の部分でも「候ふ」が現れており、このことについては、次節で、祝本の書写態度の問題としてあらためてふれることとするが、こうした能がかりの古めかしい「候ふ」を使ういっぽうで、虎明本や天理本では比率の低い二段動詞の・段化の例や、虎明本や天理本にはない接統詞「したら」がセリフに現れており、狂言固定期以前の詞章が未整理な状態にあることを示している。これらの特徴は、成立時期が近いと考えられる狂言記(特に正篇や外篇Ⅰ)と共通している。

③おち馬かす時に「此馬はすはぶきすればねる」はねぬじゆもんおしゆる。(三オ)

(▲すり) となへる事がある おしへまらせう (外篇Ⅰ「宝の槌」)

④もはやのるまじき山いふ「したら馬をなんと仕ろ」といふ。(四オ)

(▲もじ) したら。かう参ります (正篇「吟じ舞」)

内容面では、永井(一九八七)の指摘するように、大名を四度も落馬させるところなど、他台本よりかなり下

タパタ的な荒さを残しているのが祝本である。狂言記では拾遺にある曲なので時期的には開きがあるうえ、冒頭で登場するのは大名ではなくただの主（「このあたりに隠れもない者でござる」）であり、落馬も二度ほどで大蔵流の台本に近く、祝本とは内容的にも大きく異なっている。

二、子盗人

夫がまず登場し、続いて妻が子を抱いて登場、子を寝かせて夫婦が茶を飲み退場するという発端は、永井（一九八七）も述べているように、他台本と大きく異なり独特である。狂言記でも続篇にある曲だが、他台本と同じく、乳母が子を寝かせて茶を飲み退場するという発端である。また、祝本のこの曲の記述は「止動方角」に較べて簡略で、あらずじを記すだけで、セリフについての比較がしにくい。あらずじを記す部分にも、

⑤男かたなぬき あちこちへおいまわし候時 たちうちつけ候へば 子をさしだいし候時 女めいわくなる
かをして 二人の中へ入
(五ウゝ六オ)

のように、「候ふ」を用いて記しているのが注意される。「止動方角」でもふれたが、永井（一九八七）は、こうした祝本の書写態度について

簡簡さまざまあり、かなり自由な感じで書かれている。曲の配列も、本狂言の中に間狂言や三番叟の問答が混在しており、分類意識はなく、ただ心覚えのために次から次へ書き留めていったものらしい。他への伝承とか進呈するという目的意識は感じられず、個人の手控本であつたと思われる。
(一四七ベ)

と述べられており、本稿でもこの見方を支持するもので、狂言師自身の手控えであるため、記述の程度や形式にも大きな振幅が見られるのであろう。「候ふ」についても、候文のような文体で狂言の内容を書き留めたために多く現れているとも考えられる。たとえば、祝本十九番目の「さつくわ」では、

⑥大郎へ畏て御座る しうへもはやいそいでのはれ 大郎へ畏て御座るシカ／＼いふてのはる(四三オゝウ)

のように、合点（へ）や役名でセリフ部分を明示して、ト書き部分との区別をはっきりさせる書き方がなされており、台本としての体裁を持っている。これなどは天理本の記述の形式に近く、同じ祝本の中でも「止動方角」「子盗人」などとは大きく異なる。加えて、「さつくわ」など後半の曲には「候ふ」がほとんど用いられていないことを考えると、祝本の「候ふ」が全てセリフとして実際使用されていたものかについては、慎重な吟味が必要である。

注意される用語としては、これもすじがき部分であるが、

⑦ さて子をみつくる みつけてあいをして居る所へ (五ウ)

のように「子をあやす」の意味で「あいをする」という表現がある。他台本では江戸中期以降の台本に見られる表現で、虎明本や天理本、狂言記正篇・外篇には見られない。近世のことばではないだろうか。

発端だけでなく、結末も他台本や続篇が「子を捨ててにぐる」などと記すのに対し、

⑧ はしが、りへおいまわされ候て 子をうちつけ おいこみにいる也。 (六オ)

と、「止動方角」の落馬同様に荒っぽい演出である。

三、盗む雁

題名が他台本（「雁大名」「雁盗人」）とは異なっている。狂言記では外篇Ⅰに「雁大名」として載っており、成立時期が近いと考えられることから、比較は重要である。やはり詞章では「(さ)しらる」「おしらる」など、外篇Ⅰと共通する用語が見られるのだが、

⑨ 「さらばとらしられよ」といふ所で (七オ)

(▲) とりや おまへ様へ鳥はあげませう ゆるさしられい (外篇Ⅰ「雁大名」)

内容的では、外篇Ⅰを含めて他台本と祝本には異なる点が多い。例えば、冠者が買い物をする前から、

⑩大郎「かわりはいかゞ御座ろぞ」といふ (六ウ)

のように、代金の心配をしているのは、祝本だけである。また、雁を盗むための算段を、大名ではなく冠者から持ちかけているのは、他台本では和泉流天理本だけである。

・それにつれて、御心中おはづかしうはござれ共、同心なされうならば、申てみたひ事が御ざると云

(天理本「雁盗人」)

祝本との内容面での類似が、外篇Iよりも和泉流天理本に多く見られることは、永井(一九八七)にも指摘されているが、「盗む雁」を含めていくつかの曲でそのことが確認できる。用語面では、狂言記との類似が高いことと対照的である。たとえば連声を表記した例が現れるのも狂言記正篇との共通点である。

⑪それがしがんのつつととつてのきましよ (八ウ)

⑫大郎「さればこそ申さぬか。それがしがの御めにかけう」 (九ウ)

の「がの」を、永井(一九八七)では「がん」の誤りかと傍記しているが、これは正篇にある

・▲^{すり} いやこりや。わたくしがの御ざります (正篇「茶壺」)

と同じ語法で、「の」は「物」の意の、格助詞「の」の準体用法で、「誰々が物」の意で解釈できるのではないかと。つまり祝本の例は「それがしが物」の意と解してよいのではないだろうか。

四、飛越新発意

他台本では題名を「飛越」とするものが多く、祝本と同じく「飛越新発意」とするのは和泉流天理本・占本と狂言記続篇である。しかし、内容的には和泉流天理本・占本と類似する点がいくつか見られるのに対し、続篇とは異なるところが多い。

たとえば、冒頭の名乗りで、

⑬それがしは無調法に候間　こ、に別て申談るしんばちが御座る。此御方同心中さうとぞんずる。(一〇オ)
と、自分が茶の湯に無調法なのでそれに詳しい新発意を同道しようとしている点。また、二人の道行きで「数寄の様子」を新発意が男に自慢げに語る場面がある点など、天理本・古本など和泉流に近く、続篇や大蔵流・鷲流の台本には一致しない。

特に注目したいのは、新発意が茶の湯の釜の煮える音を、

⑭かまのにゆる音は　りう／＼しやぎうゑんば無音とにゆる物じや　(一〇ウ)
と説明する部分で、これは天理本にある

・ぎう／＼しやせい　ゑんらうぶゐん

キウ／＼ハ　ミミズノコエ

シヤセイハ　クルマノコエ

エンラウハ　トライナミノヲト

(天理本「飛越新発意」抜書)

が変化したものと思われる(対応については水井も指摘済み)が、「ぎうぎう」と「りうりう」は口承の過程での変化の可能性もあるが、「しやぎう」と「しやせい」、「ゑんば」と「ゑんらう」との間には、「車牛」↓「車声」、「遠波」↓「遠浪」のように、文字の誤写や誤読の過程、すなわち口承のみではなくどこかに書写の過程が介在していないと説明のつかない変化ではないだろうか。祝本そのものは、親本があつての写本とは考えにくいが、祝本の狂言にもすでに、口承のみではない、文字を介した伝承が流入していることが想定できるのではないだろうか。

また、この曲では、

⑮ないもせぬひげをくいそらいていでたれば　(一二オ)

⑯手あしをひく／＼とひくめかいて　六月の上用にあをさんせうをはいたごとくにめを見だいたのをみたれ

ば (一一ウ)

のように、サ行四段活用動詞の連用形にイ音使が用いられているのが目立つ。しかし、「盗む雁」では、
 ⑪大郎「おもいだしたる事の候 今のがんのたなをひけと申て御座る (八才)
 と非音使形が用いられており、祝本全体では「申す」を除くと左のようになっていて、

「イ音使形」

- ・ふりうのめんのきて おどいてさけのふで (「伯母が酒」四ウ ト書き)
- ・それがしがつぶてにてうちころいて候ほどに (「雁磔」二〇才)
- ・それがしがゑた、ぬやうにねらいころいておいたを (同右)
- ・それがしが分別しだいた事があるは (「附子」二二ウ)
- ・そろ／＼とひねくりまわいて (「舍弟」三七才)
- ・いかにももてないてもどさうほどに (「さつくわ」四五ウ)
- ・無調法な物をあいさつに出いては (「同右」四七才)
- ・大郎「ものゝこそはいたいた (「柑子」四九ウ)
- ・みてきもつぶいて しようできて (「拔殻」五一才 ト書き)

「非音使形」

- ・又なわ取出して大このばちにてうつて (「真奪」二五才 ト書き)
- ・大郎みな／＼よび出してなみて談合仕る (「くじ罪人」二五才 ト書き)
- ・なんじやつてからおもい出した (「さつくわ」四五才)
- ・ひろまへはいらしておけ (同右)
- ・おち出てみて坊主になして (「悪太郎」五六才 ト書き)

・めをさましてシカ／＼有て（同右 ト書き）

・シテげに今おもひ出したり（同右）五六ウ 節）

イ音便形計十三例／非音便形計八例となっており、狂言記より高いイ音便化率を示す。特にト書き的な記述の例や節がかりの例を除いて、明らかなセリフの例では虎明本や天理本に近い音便化率である。

拙稿（一九九五）でもふれたが、サ行四段動詞のイ音便は一七世紀半ばには衰退していたと見られ、祝本の状況をみると、この「飛越新発意」や「雁磔」では、全ての例がイ音便形だが、「盗む雁」では非音便形の例、「さつくわ」では音便形と非音便形の両形があらわれているなど、曲による違いも見られる。また、ト書きでは逆に非音便形が多いなど虎明本・天理本との違いも見られる。つまり、衰退したイ音便形を狂言詞章の中でどのように整理するか、祝本では未整理であることを示しており、これは祝本の成立が狂言記より古いというより、ともに狂言詞章の整理・統一への過渡期であることを反映しているためと考えたい。

五、伯母が酒

この曲でも、内容面で祝本と他台本との違いが多く、狂言記正篇の「伯母が酒」とも異なる。例えば冒頭で、祝本は、

⑬ おば先へ出ていちへ酒うりに出る 又おい跡より出て（二三ウ）

と、伯母がまず登場するが、正篇では甥が名乗って始まっている。虎明本・保教本は祝本と同じくまず伯母が名乗っており、天理本でも名乗らないものの伯母のほうが先に登場する。また、伯母が商売する酒を何とか飲もうとする甥を伯母が断り続けるところは、祝本も他台本・正篇も大差がないのだが、一度断られて帰った甥がもう一度伯母の所へ戻って頼んでまた断られるという、くどい展開になっているのは祝本だけである。その後、甥は

鬼の面で伯母を脅して酒を飲むのだが、面を付けていては酒が飲めないのです、はずしたり付けたりして最後には酔って面倒になって、他台本・正篇では足の膝に面を付けて観客の笑いを誘っている。

ここでも祝本は、

⑬「こ、みたらとつてかまふ」といふて 次第／＼にさけにあい めんをみ、のかたにきて（のちに下にめんすつる）ねいる所で （一四ウ 括弧内は行間の補筆箇所）

とあつて、面を耳に掛けて後には捨てて寝てしまうだけのようである。

ところで、鬼に化けた甥が脅すことばを見ると、祝本は、

⑭ふりうのめんのきて おどいてさけのふで 「こ、みたらとつてかまふ」といふて （一四ウ）

のように「取つて囁まう」であるが、他台本では和泉流が天理本から

・こちみたらばとつてかまふと云て （天理本「伯母が酒」）

・又飲ませまいならば、取つて囁まう （三百番集本「伯母が酒」）

と、幕末の三百番集本まで「取つて囁まう」である。大蔵流では、

・こちをみたらば いでくらはふ（虎明本「伯母が酒」）

・見たならばあたまから、いに、いでくらはう（虎寛本「伯母が酒」）

と「いで食らはう」と脅している。鷺流も

・見るな／＼いでくらをう（保教本「伯母が酒」）

と同じく「いで食らはう」を使っている。ここでも、祝本と類似するのは和泉流の表現であることに注意される

が、正篇の「伯母が酒」でも、

・是をきて。おどしてのみませう。とつてかも （正篇「伯母が酒」）

とあつて、祝本や和泉流と共通している。同じ一七世紀前半成立の祝本・天理本・正篇に共通するということは、主流の大蔵・鷺両流とは異なる系統の狂言の広まりが、十七世紀前半には残っていたことを示すのではないか。

なお、冒頭の甥の名乗りのなかで、

②⑩しかれ共、何時ならぬけんどう物で御座て (一三ウ)

とある、「けんどう物」だが、他台本では「しわい人」などであり、「慈悲のない冷たい者」の意「けんどん（慳貪）者」の転か誤りと考えられる。

六、おわりに

祝本の前半の五つの曲を中心に比較をしてきたが、他台本のみならず狂言記とも、内容面で全体的に近似した狂言は、見いだすことは出来なかった。ただし、部分的には和泉流天理本との類似が「盗む雁」「飛越新発意」「伯母が酒」に見られた。特に「飛越新発意」では筆写や写本を介した伝承があったことも推定した。

また、前稿で指摘した「候ふ」の多用についても、記述の形態との関連があることから、慎重な吟味がさらに必要であることを述べた。サ行四段動詞連用形イ音便についても、音便化率が高い点で狂言記とは異なり、これも成立時期の違いというより、詞章整理・統一の方向性の違いと捉えた。

少ないとはいえ二十三の狂言を収載する祝本である。記述の形態にも差が大きい。さらに詳細な比較を試みていくこととした。

以上

(注)

(1) 永井(一九八七)の翻刻・解説による。引用に当たっては、他の台本との比較の便を考慮して、表記などを改め、濁点を補った。

(2)

本稿で比較に用いた狂言台本および版本狂言記は以下の通りである。(一)内は本稿での略称。

・天正狂言本 固定化以前の室町後期の狂言を残す台本。内山弘『天正狂言本文・総索引・研究』(平一〇等間書院)を用いた。

・大藏虎明書写『狂言之本』(虎明本) 寛永・九(一六四二)年書写。池田廣司・北原保雄共著『狂言集の研究』(昭四七)五八 表現社)を用い、複製本を参照した。

・天理図書館蔵『狂言六義』(天理本) 寛永・正保ごろ山脇和泉元宜か元永書写か。北原保雄・小林賢次共著『狂言六義全注』を用い、複製本を参照した。

・『狂言三百番集』(三百番集本) 野々村戒・安藤常次郎共編(昭・三・七 富山房)を用いた。底本は幕末

の和泉流狂言師三宅市手沢本をもとにしたもの。

・鷺保教本(保教本) 享保年間鷺伝右衛門保教書写。天理図書館善本叢書『鷺流狂言伝書』を用いた。

・『名人狂言記』(正篇) 万治三(一六六〇)年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記の研究』(昭五八 勉誠社)を用いた。

・『新板絵入狂言記外五十番』(外篇) 元禄・三(一七〇〇)年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記外五十番の研究』(平九 勉誠社)を用い、鴻山文庫蔵本を参照した。

・『続狂言記』(続篇) 元禄・三(一七〇〇)年刊。北原保雄・小林賢次共著『続狂言記の研究』(昭六〇 勉誠社)を用いた。

・『狂言記拾遺』(拾遺) 享保・五(一七三〇)年刊。北原保雄・吉見孝夫共著『狂言記拾遺の研究』(昭六二 勉誠社)を用いた。

(3) 以下、四種三百番の版本狂言記を総称して「狂言記」と呼ぶ。

(4) 小林賢次(一九九六)(二〇〇〇)参照。

〔参考文献〕

池田廣司(一九五三)『版本狂言記の台本について』(『国語』二一三 昭和二八年九月)

同(一九六七)『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』(昭和四二年 風間書房)

- 大倉 浩 (一九九五) 『狂言記に見るサ行四段動詞のイ音便形』(『文芸・言語研究 言語篇』二七 平成七年三月)
 同 (二〇〇一) 『祝本狂言集と狂言記——外篇の用語との比較から——』(『文芸・言語研究 言語篇』三九 平成二三年三月)
- 小林賢次 (一九九六) 『日本語条件表現史の研究』(平成八年 ひつじ書房)
 同 (二〇〇〇) 『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』(平成二二年 勉誠出版)
 小山弘志 (一九五六) 『狂言の変遷』(『文学』昭和三二年 七月)
 坂口 至 (一九九一) 『祝本狂言集』の表記(『筑紫語学研究』二 平成三年十二月)
 同 (一九九七) 『祝本狂言集』用語考(『熊本大学国語国文学研究』三 平成九年二月)
 永井 猛 (一九八七) 『祝本狂言集』翻刻と解説(『能楽研究』一二 昭和六二年三月)
 橋本朝生・土井洋一 (一九九六) 『狂言記 新日本古典文学大系58』(平成八年 岩波書店)
 蜂谷清人 (一九七七) 『狂言台本の国語学的研究』(昭和五二年 笠間書院)
 同 (一九八〇) 『狂言のことば(補)』(『能楽全書 総合新訂版五』昭和五五年八月 東京創元社)
 同 (一九九八) 『狂言の国語史的研究』(平成一〇年 明治書院)